

2021 年 1 月 29 日

2021 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科

課題研究

新型コロナウイルス感染症拡大による外出自粛下における
女性の DV 被害と支援の実態

Actual Conditions of women's DV Damage and Support
During COVID-19 Quarantine

19MW001

加藤 雛子

要旨

【目的】本研究では、助産師及び看護師、臨床心理士、相談員などの DV 被害者支援の実施者へインタビューを通して、COVID-19 拡大による外出自粛下における、社会・経済、コミュニティの変化の中での、女性の DV 被害の実態、DV 被害者に実施されている支援や支援のニーズ、支援者の課題を明らかにすることを目的とする。

【方法】本研究デザインは、半構成的面接法を用いた質的記述研究である。本研究の対象者は、助産師及び看護師、臨床心理士、相談員などの DV 被害者支援の実施者とした。インタビューガイドに基づいて約 60 分/人の半構成的面接を行い、研究対象者の基本情報（職業、DV 被害者支援に関する学習経験、所属施設を利用する患者の特徴）、COVID-19 禍の DV 被害の実態、実施されている支援の実態、支援者が女性から感じる支援へのニーズ、支援を実施していく中で感じる課題について質問した。インタビューデータの分析は、DV 被害や支援の実態、支援のニーズ、支援に対する課題に関連する録音・録画された内容をもとに逐語録を作成しコード化を行い、カテゴリーやサブカテゴリーを抽出した。

【結果】総合病院産科外来勤務 3 名、助産院勤務兼 DV 被害者支援事務所勤務 1 名、DV 被害者支援センター勤務 1 名の計 5 名にインタビューを行った。5 名の DV 被害者支援経験は平均 15.8 年、インタビュー時間は平均 63.6 分であった。分析の結果、(COVID-19) 禍における DV 被害の実態は、【精神的・経済的 DV の増加】【DV 被害の重症化】【パートナーへの恐怖感の増大】【外部との関わり・支援を得ることが困難】【既存の生活を続けることを選択せざるを得ない】【面前 DV の増加】という 6 つのカテゴリーから構成され、17 のサブカテゴリーが含まれていた。また、DV 被害者支援の実態では、【DV 被害の早期発見・支援の推進】【相談・支援に結びつく環境作り】【地域の支援機関・多職種と連携】【DV への対処を考えるきっかけ作り】【女性の安全を確保する】【生活を変えようとする行動の後押し】という 6 つのカテゴリーが抽出され、16 のサブカテゴリーが含まれた。

【結論】COVID-19 禍の、DV の増加や重症化をもたらす環境の中で、女性はパートナーと離れられず DV が存在する生活をせざるを得ない実態がある。女性は支援者へ、現状理解を求めるニーズや、パートナーと離れたあとの生活に困らない方法を考えたうえで決断したいというニーズを抱えて過ごしていることが示唆された。パートナーと離れられない環境や感染の不安、女性が抱くニーズにより、DV から逃げる決断までに期間を要すると思われ、支援者は、DV への対処行動につなぐことを阻害する要因が存在する環境の中で暴力から女性や子どもをどう守るのが課題であることが示唆された。